様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３７５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０６２３

研究課題名（和文）「街を教室にする」プロジェクト―社会参加をめざす日本語教育における教員の役割

研究課題名（英文）A project for moving from the classroom to the community:The roles of Japanese teachers to facilitate students' learning and study in society

研究代表者
本田　明子（HONDA, Akiko）

立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・准教授

研究者番号：８０３３１１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、「社会につながる」日本語の教育の実践における教員の役割を明らかにすることを目的とし、学習者と母語話者のインターアクションを取り入れた学習活動（「街を教室にする」プロジェクト）を実施し、参加者の意識や学びの質に教員が及ぼす影響を調査･分析した。データは参与観察、録音・録画、インタビュー、アンケートにより収集し、学習者・母語話者・教員の三者の側面から分析をおこなった。その結果、学習活動のタイプによって、三者の関係に変化が生じ、役割が流動化することで、それぞれの意識に変化があらわれ、「社会につながる」日本語の教育に影響をもたらすことが確認された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the practical role of teachers in a Japanese-language education that “connects with society.” We arranged a learning activity involving interactions between learners and native speakers (the project for moving from the classroom to the community), allowing us to survey and analyze teachers’ influence on participant perception and learning quality. The data was gathered from participant observations, audio and video recordings, interviews, and questionnaires. We analyzed the data from the three standpoints of learner, native speaker, and teacher. Our conclusion based on the results is that the type of learning activity affects how the three relate among themselves, introducing a role fluidity that brings about changes in each person’s perception, thus having an influence on the Japanese-language education that “connects with society.”

研究分野：日本語教育学　社会言語学

キーワード：インターアクション　母語話者の意識　学習者の意識　教員の意識　学習活動　相互作用　活動型学習　多文化共生

１．研究開始当初の背景

日本語学習者の質の変化にともない、日本語教育において「社会とのつながり」「社会参加」（佐藤・熊谷編 2011）が注目され、日本語教育学会においても「日本語教育のアーティキュレーション（連関）」に関する研究のプロジェクトが進行するなどといった動きがみられる。従来の日本語教育は日本に興味があり日本語を勉強するために日本に来た学習者を対象としていた。そのため、なぜ日本語を学ぶのか、何のために日本語を教えるのかといったことを問題にする必要があまりなかった。しかし、近年、グローバル化が進む社会のなかで、働くために来て、生活するために日本語を学ぶ学習者が増え、そのような学習者のニーズに応えるためにも社会とのつながりが注目されるようになってきた。日本語教育学会の大会の予稿集を見ると、1999 年度には、地域の日本語教室や生活者のための日本語教育といったテーマを取り上げた研究発表は年間で 4 件（全 72 件中５%）なのに対し、2013 年度は 27 件（全 137 件中 19.7%）に増えている。このことからも日本語教育の動向が、グローバル化にともなう社会の変化とともに大きく変化、発展していることがわかる。

本研究のメンバーは、立命館アジア太平洋大学（以下 APU）で、留学生の日本語教育を担当している。この大学には、80 を越える国と地域からの3000名弱の留学生と3000名強の国内学生（主に日本人）が在籍しており、留学生の出身国の多様性とこの規模の大学での留学生比率の高さは国内では群を抜いている。この大学の開学にあたり、地域には反対運動もあり、当初は、一部の住民からではあるが留学生が心無い言葉を浴びせられたということもあった。こうしたなかで留学生がいかに地域に溶け込むかは重要な課題であった。そのための一つの試みとして、開学の年の秋から、地域の母語話者をボランティアとして教室に招き留学生の会話練習パートナーを務めてもらうという活動を続けている。2014 年の時点では、地域のボランティア参加経験者は600名近くになっていた。この活動のなかで、留学生（学習者）がより地域社会に溶け込むためには、地域のバリエーション（方言）への理解が必要ではないかと感じ、2005 年度～2007 年度まで科学研究費補助金（「日本語教育における地域語の指導法の開発および教材の作成」）を得て、地域につながる日本語教育のための地域語の指導法を研究した。この研究は方言をどのように日本語教育に取り入れるかを考えたものであるが、その目的は学習者が地域社会で共生していくことであり、母語話者と学習者の接触場面（で使われる方言）の調査をおこなった。そのなかで、地域に溶け込むという発想では、学習者が一方的に母語話者に同化することが求められがちだが、共生のためには母語話者の変容も不可欠であり、その両者をつなぐものとしての役割を教員が果たせるのではないかとの着想を得た。本研究課題である「街を教室にする」プロジェクトは、このときの着想がもとになっている。

２．研究の目的

「街を教室にする」プロジェクトとは、トムソン（2007）で提唱された「壁のない教室」すなわち「教室の壁を越えた日本語教育の試みのコンセプト」に基づいている。「壁のない教室」はコミュニティを学習環境ととらえ、学習者がコミュニティの中で日本語話者との相互交流を行い、学んでいくというものであるが、「街を教室にする」はそこから発展したアイディアで、「コミュニティ全体が教室で、そこにいる人々は学習者･母語話者の隔てなく、すべてが学ぶ人である」というコンセプトにもとづく。そこでは、学習者と母語話者の隔てもなく、また学習者と教員という対立もなく、すべてが学ぶ人となる。このように教室となった街は、やがて新しい共生社会へと成長していく。つまり、このプロジェクトの最終目標は多文化共生社会の構築である。このようなコンセプトで、2010 年ごろから､APU の中級クラスの授業では上述の母語話者が教室に来て交流する活動と、学生が街に出てインタビューなどをおこない地域について調査するという双方向の活動を組み合わせたインターアクション学習を実施してきた。本研究の研究メンバーは、この活動のなかで学習者、母語話者が何を学んでいくかの研究に取り組んできた。従来、このような研究では学習者の学びに焦点が当てられることが多かった。しかし、本研究グループは学習者だけではなく母語話者の変容も研究の対象とし、双方向からの総合的な研究をおこなってきた。そのなかで、このような取り組みにおいて、実は学習者と母語話者だけではなく教員の果たす役割にも目を向けるべきであることがわかってきた。日本国内で日本語教育をおこなう場合、日本語の担当教員は、学習者が来日した当初もっとも親しく接する日本人の一人でもある。そのために学習者との関係が近く、教員は学習者を自分の懐に入れて大切に守ろうとする意識をもつ傾向が生じる。また、自分の生まれ育ったコミュニティを離れて日本語教員となっている場合も多く、学習者以前に教員自身がコミュニティとのつながりをもたないという状況もありうる。このような教員の意識や状況が、学習者が社会につながるための障壁になる可能性もある。

こうしたことから、本研究の目的は、学習者も母語話者も教員も等しく学ぶ人となり、コミュニティのメンバーとしてつながる空間を作ることをめざして「街を教室にする」プロジェクトを実施し、教員が参加者の意識や学びの質にどのような影響を与えるかを調査することである。

「社会につながる日本語教育」を実施する

うえで、教員は学習活動の設計者でもあり、運営者でもある。本研究では、実際におこなわれている学習のデザイン、実施のさいの教員の意識と行動を調査し、教員のねらいが学習活動の参加者に理解されているか、教員の意識が参加者や学習活動の成果にどのような影響を与えるかを分析し、その結果をもとに社会と学習者を結ぶファシリテーターとして教員がどうあるべきかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、１次調査として実際におこなわれている学習活動（「街を教室にする」プロジェクト）のデータを収集し、参加者（学習者･母語話者）の学びの過程や成果に、教員の学習デザイン・授業運営・実施上の意識がどのように影響するかを分析した。

その結果をもとに、新たな学習活動を考案して実施し、データを収集したうえで、1 次調査と同様の分析をおこなった。

データ収集の対象は、学習活動に参加した教員・学習者・母語話者である。教員に対しては、インタビュー、教室観察をおこない、学習デザイン、授業運営法、実施に当たる教員の意識を調査した。学習者・母語話者には、アンケート、インタビューをおこない、学習活動を通じた学びの成果と意識の変容、そこへの教員の影響を調査した。

４．研究成果

1 次調査の対象としたのは、研究メンバーが実際におこなっている学習活動である。この時点では、以下の 3 つのインターアクション活動が実施されていた。

①学習者⇔異世代母語話者（地域の母語話者を招いたビジターセッション）
②学習者⇔同世代母語話者（学内の日本人学生との交流授業）
③学習者⇔学外の母語話者（地域でのインタビュー活動）

これらの活動について、参加した教員・学習者・母語話者という 3 者の側面から分析をおこなった。

（1）学習者に関する分析結果

これらの学習活動に参加した学生のうち、初級から上級までの学習者 384 名がアンケートに回答した。そのうち 92%はビジターセッションを希望している（井上他 2014）。そして、この活動は地域の母語話者に良い印象をもつきっかけにもなっているが、地域の母語話者と交流を続けたいという意欲にはつながっていないことがわかった（寺嶋他 2015）。

交流の内容としては、学習者が一方的に教えられる立場に立つのではなく、互いが知りたいことを学び合うことを希望している（井上他 2014）。

さらに、インタビュー活動について、2014 年度秋学期の 206 名の学習者を対象にアンケート調査（有効回答数 126）を実施した。この調査では、「活動」を 5 段階で評価させ、その評価が何に基づくのか、統計解析ソフトウェア PASW Statistics18.0 を用いて他の項目との相関を調べた。

その結果、学習者の 75%は、この活動を「とてもよかった」「よかった」と評価しており、この評価は「日本語学習の役に立ったか」「またインタビューしたいか」「先生の説明はわかりやすかったか」という項目と相関があった。また、「最も楽しかったこと」は、母語話者へのインタビューであった。インタビューは自分で相手を探して行うため、断られることもあったが、断られた経験と活動の評価には関連がなかった。一方で、グループワークやトピックに不満を感じる学習者が多く、「活動」の評価は学習者が一人で対処できることではなく、学習者単独では解決できない協働学習部分への不満と関わっていることがわかった。

（2）母語話者に関する分析結果

インタビュー活動に参加した母語話者に対する調査では、国際交流に関心が高い母語話者と、関心が低い母語話者に差がみられた。前者は、活動に参加することが母語話者・学習者双方にとっての異文化交流の機会ととらえているが、後者は学習者のメリットのみに言及し、この活動を自分自身が学ぶ場とは考えていないことがわかった（板橋他 2014）。

また、ビジターセッションに参加した母語話者に対する調査では、異文化に対する関心は高いものの、学習者の学習をサポートする役割への意識が強く、自分の立場を「教える人」ととらえる傾向が強いことがわかった。それに対して、教員は活動への参加者として学習者と同等にとらえていた。そして、学習者は、母語話者に同等の関係であることを求めているにもかかわらず、そうではないことに不満を感じていた。

（3）教員に関する分析結果

教員に対しては、アンケートによるビリーフ調査をおこなった。このビリーフ調査は、日本語教育観に関する 12 項目と、学習活動に関するビリーフ、１）インターアクション全般（「セッションの目的は日本の文化や習慣を学ぶことである」など）、２）教員（「セッションがうまくいくかどうかは授業のときの教員の指示によって決まる」など）、３）母語話者（「母語話者は日本についてよく知っているべきだ」など）、４）学習者（「学習者はセッションに積極的に取り組むべきだ」など）の 4 領域 25 項目からなる。

このビリーフ調査の結果、以下のことがあきらかになった。

①教員は、学習者が生の日本語に触れたり、クラス外でも努力したりすることを期待しながら、教室内では学習者の能力に合わせて調整された日本語で接することが望ましいと考えている
②教員は、予定どおりに授業を進め、学習者

に規律ある態度をとらせ、公平に接することが教員の役割であるという意識を持っている
③教員は、インターアクションを取り入れた学習活動の実施者としての役割意識を持ちつつ、インターアクションの主体は学習者・母語話者であると考えている
④教員は、異世代の母語話者に対し、学習者に知識や経験、日本の文化習慣を伝える役割を期待しつつ、母語話者も学習者から学ぶことを期待している

ビリーフ調査にみられたのは、教員の学生の学びを尊重する姿勢、規範意識の強さである。これは、教員として学習者の学習に責任を持つという責任感のあらわれだと思われる。そのため、ビジターセッションという教室内での授業活動に参加する異世代母語話者に対し、授業活動の効果をもたらす知識や経験を求め、なおかつ学習者の聞き役になるという学習者への配慮も求めるというように、教員と同じような役割を果たすという高い期待を抱く傾向がみられた。それに対して、同世代母語話者に対しては、学習者と同じ学生であるという意識から、多くを求めない傾向があった。

これらの１次調査の結果からあきらかになったのは、ビジターセッションのような教室内の活動、英語交流やインタビュー活動のような授業としての活動は、参加者たちの期待は高いものの、実施後にはいくつかの課題がみられることであった。その課題とは、母語話者・学習者の関係の不均衡性と、参加者が自分自身でコントロールできない部分への不満、教員と母語話者との意識の違い、活動が参加者の継続的な交流にはつながらないことである。

この結果をもとに、新たな学習活動を考案し、それを実施して、2 次調査をおこなった。

新たな学習活動とは、以下の３つのものである。

① 学外（授業外）での交流会
② 町歩きへの参加
③ 町歩きクイズラリー

①は、教室や授業を離れた自由参加の交流会であるが、教員は日程と場所を準備し、参加希望の学習者が母語話者を誘って参加し、当日の運営はすべて学習者が主体的におこなった。教員は参加者の前には顔を出さず、問題があっても参加者同士で解決がなされた。②は、地域の既存の活動を利用して、母語話者と学習者の交流の機会としたもので、町歩きの主催者（地域の母語話者）が主体となり、学習者と母語話者および教員が参加した。③は、スマートフォンアプリ「まちクエスト」をもちいた交流イベントで、新たなイベントを地域に作りだす試みである。この活動は、即興性の高い実質的アクティビティとしてこれまでの活動になかった性質を有している。

これらの活動が、これまでの活動と異なる点は、①教員が「教える人」として活動の場に存在することをやめること、②「街」のなかにある既存の活動に教員も一参加者として関わり、母語話者・学習者・母語話者の関係性を再構築する試み、③「街」に学習目的ではなく新たなつながりを模索する活動を創出したことである。この新たな試みによって教員の役割を見直すことができた。

この新しい学習活動についても、実施記録、アンケート、インタビューによりデータを収集した。また、教員に対しては継続的なインタビュー調査も実施した。

その結果、これらの学習活動によって教員と学習者という関係に変化が生じ、教員から学生へという一方向から、双方向の関係性が構築できること、それにより教員の意識にゆとりが生じ、客観性が増すことが観察された。また、「授業」や「学習」を離れた交流の場においては、参加者間のつながりが密になり、その後の個人的な親交へと発展していきやすいことがわかった。さらに、教員に対する継続的な調査からは、こうした活動に参加して、母語話者や学習者との新たなかかわりが生まれることにより、教員自身に自分の役割を見直す意識が生まれ、自身の成長を意識化していることが確認できた。

本研究の課題は、「街を教室にする」プロジェクトにおける教員の役割をあきらかにすることであったが、研究の結果、わかったことは、教員の役割は固定的なものではないということである。教員が自分の役割を固定的に考えることで、学習者・母語話者・教員の関係に柔軟性が失われてしまうが、そのことが参加者の不満につながり、学習活動の効果が損なわれる結果となる。そうした固定的な関係を意識的に変化させることは、参加者それぞれの意識を変化させ、主体的な学びにつながっていく。また、教員自身の意識の変革は、教員を成長させることにもなる。

今後の課題として、「街」で生まれた学びを教室に還元し、そこからまた新たな学習を発信して、「街」に出るという循環を生み出せるような学習活動のシステムを構築し、さらに効果的な学習活動を実施していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

① 戸坂弥寿美・寺嶋弘道・井上佳子・高尾まり子（2016）「学外での日本語母語話者へのインタビュー活動に関する一考察－学習者の不安とその変化を中心に－」『日本語教育』164 号，pp79-93，査読あり
② 本田明子・石村文恵・小森千佳江（2016）「インターアクションを導入した活動型教育への日本語教員の意識―インターアクション教育における教員の役割とは―」

『APU 言語研究論叢』1 巻，pp.85-97，査読なし

③ 寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子・高尾まり子（2015）「学外でのインタビュー活動における日本語学習者の意識 ―日本語学習者が感じる不安と成長―」『日本語教育方法研究会誌』22 巻 1 号,pp.6-7，査読なし

④ 井上佳子・高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美（2014）「ビジターセッションに対する学習者の意識－より効果的なビジター－セッションの運営に向けて－」『ポリグロシア』26 巻，pp105-120，査読なし

〔学会発表〕（計 10 件）

① 本田明子・石村文恵・小森千佳江（2016.9.10）「学習活動の選択に関わる教員の意識に関する質的研究―「街を教室にする」プロジェクトの実践から」International Conference of Japanese Language Education（日本語教育国際研究大会），バリ（インドネシア）

② 井上佳子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・高尾まり子（2016.9.10）「『街を教室にする』プロジェクト：学習者の母語話者とのつながりを生かした活動型学習とその考察」International Conference of Japanese Language Education（日本語教育国際研究大会），バリ（インドネシア）

③ 廣津公子・板橋民子・松井一美（2016.9.10）「『街を教室にする』プロジェクト：活動型学習における『誘い』の意義」International Conference of Japanese Language Education（日本語教育国際研究大会），バリ（インドネシア）

④ 吉里さち子・板橋民子・松井一美（2015.2.28）「日本語学習者が母語話者との接触場面で用いる『わかりました』の機能について-学習者が行ったインタビュー及び学習者へのフォローアップインタビューより-」第 10 回日本語教育学会研究集会，龍谷大学（京都府･京都市）

⑤ 本田明子・石村文恵・小森千佳江（2014.7.5）「学習者は地域とのつながりを目指す活動型学習をどう評価するか―活動評価アンケートの結果分析をもとに―」日本語教育学会研究集会中部地区大会，愛知大学（愛知県・名古屋市）

⑥ 本田明子・石村文恵・小森千佳江（2014.8.2）「街を教室にするプロジェクト ―社会参加をめざす日本語教育における教員の役割―」日本語教育学会 2014 年度実践研究フォーラム，東京外国語大学（東京都・府中市）

⑦ 松井一美・板橋民子・吉里さち子（2014.9.6）「地域住民へのインタビュー活動に対する母語話者の評価−フォローアップインタビューの SCAT 分析より−」2014 年度第６回日本語教育学会研究集会，YMCA 国際専門学校（大阪府・大阪市）

６．研究組織

(1)研究代表者

本田　明子（HONDA, Akiko）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・准教授
研究者番号：80331130

(2)研究分担者

寺嶋　弘道（TERAJIMA,　Hiromichi）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・准教授
研究者番号：90454967

板橋　民子（ITABASHI, Tamiko）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：80469402

(3)連携研究者

石村　文恵（ISHIMURA, Fumie）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：10611402

小森　千佳江（KOMORI,　Chikae）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：40646709

吉里　さち子（YOSHISATO, Sachiko）
熊本大学・グローバル教育カレッジ
日本語・日本文化教育センター・准教授
研究者番号：20544448

松井　一美（MATSUI, Kazumi）
早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授
研究者番号：10611353

(4)研究協力者

廣津　公子（HIROTSU, Koko）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：50793593

井上　佳子（INOUE, Yoshiko）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：40793526

戸坂　弥寿美（TOSAKA, Yasumi）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：50461653

高尾　まり子（TAKAO, Mariko）
立命館アジア太平洋大学・言語教育センター・講師
研究者番号：50793519